『シュンペーター』再読

伊東光晴・根井雅弘両氏による 1993 年に出版された岩波新書である。ずいぶん前に目を通したが、先日『ガルブレイス』を読んで再読したくなった。伊東光晴先生「社会経済思想史研究三部作」だけに読み応えがある。

表紙カバー裏から—「不況は”お湿り”」と喝破したシュンペーター。ケインズと並び 20 世紀を代表するこの経済学者は、ヨーロッパ、アメリカでの生涯を通して、資本主義の本質を問い続けた。三度の結婚、大蔵大臣としての挫折など起伏に富んだ軌跡を追いながら、今こそ光彩を放つそのイノヴェーション論、景気循環論、企業者像、さらには社会主義観を描く。

じつに内容豊富で、難解なところも多い。序章の冒頭と V の「シュンペーターと現代」の一部を紹介したい。

1883 年、カール・マルクスが亡命の地ロンドンで死んだ年、20 世紀を代表する二人の経済学者が生まれた。一人は J・M・ケインズ、そしてもう一人がヨゼフ・アロイス・シュンペーターであった。ケインズとシュンペーターは、ある意味で対照的である。ケインズはまぎれもなくイギリスの経済学者であった。かれが経済問題について語るとき、それは 20 世紀に入って衰えていくイギリス経済の問題点を明らかにし、それへの処方箋を書き、政治家がえらぶべき政策を提起するものであった。

だが、シュンペーターの経済学は、あくまでも書斎の人のそれであった。政治に関係することは—ただ一度の例外を除いて—ありえなかった。かれはたえず現実から一歩離れ、さめた目で対象を観察していく人であった。かれの経済学は、その生を享けたオーストリアのためのものでも、教授職を与えたドイツのためのものでも、めぐまれた教職を用意し、その生涯をとじたアメリカのためのものでもなかった。資本主義の本質いかん、資本主義を資本主義たらしめるものは、いったい何なのか、そして資本主義の命運は？これが、かれの一生を通じて追い求めた経済学の主題であった。そこには、特定の国の利益という視点は入る余地がなかった。

シュンペーター経済学の今日的意味はどこにあるのか。その第一は、経済にとってもっとも大切なことは、技術革新であり、新製品による新市場の創設であり、コスト低下にもとづく供給曲線の下へのシフトであることを強調したことであろう。たしかにケインズ『一般理論』の登場によって、経済学は一変した。人々がどのような経済行動をとろうとも—したがって利潤拡大とか、消費者の満足極大とかいう、機械論的一元主義の行動をとらなくても—社会全体としての投資と貯蓄は等しくなり、投資の総計と所得の

総計との間には一定の関係があるというマクロ理論の登場によって、20 世紀の新しい科学主義は前進した。しかし、これがアメリカに移植されたとき、それは社会全体の有効需要を操作し、所得の水準と雇用水準を適正に保つというだけのものになってしまった。

だが経済にとって重要なのは、こうした需要サイドを操作するだけでなく、何よりも供給サイドの革新である。戦後の経済の教訓はこのことを教えた。供給サイドの革新をおこたり、有効需要操作だけを行なった国は国際競争に敗れていったのである。シュンペーター的長期のヴィジョンなしに、有効需要操作という短期の視点は成果を生みえなかった。シュンペーター経済学の第一の意味が、ここにある。

（2016年4月6日）